

申請者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	名越 恵美 印
調査研究課題	急性期成人看護学実習における学生のレジリエンスを促進する要因					
交付決定額	20万円					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	名越恵美	看護学科・准教授	成人看護学	研究統括・分析・まとめ	
	分担者	犬飼智子	看護学科・助教	成人看護学	データ収集・分析	
調査研究実績の概要	<p>2段階に分けて、質的研究と量的研究を実施し、3つの学会発表（1つはエントリー中）を行った。以下調査別にまとめる。</p> <p>調査1）平成25年1月より平成25年9月まで</p> <p>【目的】急性期実習におけるレジリエンスを促進するための学生の要因を明らかにする。</p> <p>【対象】看護系大学 3・4年生で急性期成人看護学実習を終了した学生</p> <p>【期間】平成25年1月～平成25年5月</p> <p>【方法】データの収集方法：急性期成人看護学実習における学生のレジリエンスを促進するための要因について自記式アンケート調査を実施した。実施時期は、急性期成人看護学実習終了時とし、アンケート配布後集合法で回収を行った。分析方法：1）アンケートの学生の記述内容より、状況に適応しようと努力している内容を質的帰納的に分析した。回収された質問紙から順に記述されている内容をカード化した。分析は、KJ法の手法を用い看護学生のレジリエンスを促進するための要因を分析した。</p> <p>倫理的配慮：本研究はA大学倫理委員会の承認を得、アンケート配布時、研究目的・方法・参加の自由意志・プライバシーの保護等について説明し同意を得た。</p> <p>【結果】分析対象者は37名、全員女性であった。分析の結果は、学生が実習を乗り越えていく要因として、[前向きな気持ち][私を支える他者の存在][グループメンバーとの相互作用][私に寄せられる関心]が抽出され、レジリエンスを高める支援として《精神的サポート》《迅速・的確なアドバイス》《自立志向を支える》が抽出された。</p> <p>【考察】《精神的サポート》は、学生である私に興味・関心を持って接してくれる事や、私に向けられる感情を指す。他者からの承認は、情緒を安定させ自己の存在を確立させる。私に関心を持ってもらうことでレジリエンス要因である自己統御力を高め、不安などの感情を統制する力を得ようとしていると考えられる。《迅速・的確なアドバイス》は、</p>					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>学生の問題解決志向であり、積極的に問題を解決しようとする意思をもつことで、レジリエンス要因であるコンピテンスを認知し、効力感を得る前段階であると考えられる。《自立志向を支える》は、学習者としての自分自身を理解し、学ぶために必要な自分自身の目標や行動を調整できる力を培おうとしていると考えられる。</p> <p>7.まとめ：学生は、困難感を感じた時に指導者へ頼る傾向がみられる反面、情緒の安定と問題解決志向に対してレジリエンスを高めるための指導者の役割を期待していた。指導者は、学生が自信を持ち前向きな気持ちで急性期実習が行えるように関わり、自己統制力を高めるような指導の必要性が示唆された。また、困難を乗り越える要因として、他者との相互作用に影響を受けることが明らかとなり、グループメンバーや周囲の人との良好な人間関係を形成できるよう調整する必要性が示唆された。</p> <p>(平成25年度看護教育学学会・平成25年度看護科学学会で成果を発表した。)</p> <p>調査2：平成25年9月～平成26年5月まで (研究途中のため経過報告)</p> <p>【方法】他大学は、9月～3月までの実習のため、アンケート配布を平成25年9月以降に実施した。現在、岡山県立大学は実習中であり、データ収集中である。</p> <p>データ収集方法：看護系大学への依頼を行い、承認後、急性期成人看護学実習終了後に質問紙を配布し、集合法で回収した。</p> <p>【対象】中国地方における4大学の看護系大学3年生で急性期成人看護学実習を終了した女子学生。データ収集方法は、急性期成人看護学実習における学生のレジリエンスを促進するためのサポート体制、要因については「S-H式レジリエンス検査」によるアンケート調査を実施した。実施時期は、急性期成人看護学実習終了時とし、アンケート配布後留め置き法で回収を行った。分析方法は、サポート体制として学生の周囲で一番サポートを受けた人とその度合いを5段階評価した。要因は「ソーシャルサポート」、「自己効力感」、「社会性」があり判定表に基づき点数化し高い・普通・低いで評価した。倫理的配慮：A大学倫理委員会により承認を受けた後、学生に目的を説明し、匿名性の確保、参加の自由、成績評価に影響なし等を説明し同意を得た。</p> <p>【結果】対象となる学生は38名、平均年齢21.0±1.7歳であった。サポート体制としては、一番サポートを受けたのは、グループメンバー(以下メンバー)で13名(39.4%)であり、次いで教員・家族・友人それぞれ5名(15.2%)であった。サポートの度合いは、看護師3.8、家族3.8、友人4.1、メンバー4.5、教員4.0、患者3.9、自分自身3.1であった。「ソーシャルサポート」は、51.4±10.1(高い33.3%、普通40.5%、低い26.2%)「自己効力感」33.6±7.1(高い11.9%、普通66.7%、低い21.4%)「社会性」17.6±4.2(高い26.2%、普通47.6%、低い26.2%)であった。「合計」102.7±19.6(高い26.2%、普通47.6%、低い26.2%)であった。</p> <p>【考察】レジリエンス得点は、男女差があることから本研究では女子学生を対象とした。判定基準の成人女子の平均と比較すると「ソーシャルサポート」は、51.4であり基準値51.1とほぼ同じ傾向にあった。「自己効力感」33.6と基準値34.1、「社会性」17.6と基準値18.1、「合計」102.7と基準値103.4と比較するとやや低い傾向にあるものの有意差は見られなかった。以上から、対象学生は、平均的なレジリエンスを持っていると考えられる。サポート体制では、サポートはほぼ得られているが、メンバーのサポートが強いことから、グループダイナミクスを形成することがレジリエンスを高める一つの要因であると考えられる。13%の学生は、家族のサポート体制が弱かったため他のサポートで補えているかを確認する必要があると、学生の居住形態との関係も分析する必要性が示唆された。</p> <p>(平成26年度看護研究学会にエントリー中)</p> <p>今後は、全データの収集後、レジリエンスを高める要因についての検討を行う。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>1. 名越恵美、甚田愛、荒井葉子(2013)：成人看護学急性期実習における学生のレジリエンスを高める教員の関わりの検討. 日本看護学教育学会誌 23巻学術集会講演集 P168.</p> <p>2. 犬飼智子、名越恵美(2013)：成人看護学急性期実習におけるレジリエンスに関する学生の指導へのニーズ. 日本看護科学学会学術集会講演集33回 P462.</p>